

松 山 大 学 論 集
第 20 卷 第 2 号 抜 刷
2 0 0 8 年 6 月 発 行

レーニンの政治的諸実践の再検証：
レーニンの相対化から訣別へ

千 石 好 郎

レーニンの政治的諸実践の再検証： レーニンの相対化から訣別へ

千 石 好 郎

第一節 「未完のレーニン」か、「グッバイ・レーニン」か

(a) マルクス主義の歴史的段階区分

私は、3年前「日本におけるレーニン像の転換」論文を書き、マルクス主義の歴史を〈教会（Kirche）→宗派（Sekte）→絶えざる細分化（Denomination）〉の展開として把握した¹⁾

キリスト教の歴史において、カソリックがバチカンを総本山として一元的な体制を構築していた「教会（Kirche）段階」から、ルターやカルヴァンの宗教改革が開始され、カソリックとプロテスタンティズムの二元化が開始されたのである。それに類比して、レーニン死後スターリンが権力を固めて確立したモスクワを総本山とする「マルクス・レーニン主義（＝スターリン主義）」の一元体制が、1956年のソ連共産党20回大会におけるフルシチョフ書記長のスターリン批判を契機に、スターリンとレーニン（およびトロツキー）の二元体制へ移行したのである。それがさらに1991年のソ連崩壊後、マルクス主義は「絶えざる細分化（Denomination）」の時代に推移しているというのが、私の状況判断である。そのなかで、マルクス主義の「教会（Kirche）段階」の主役であったレーニン主義の根底からの総括が必要ではなからうか？ なぜなら、昨年(2007)、白井聡『未完のレーニン』が登場したように²⁾、レーニンの評価は、不安定に揺れ動いているからである。したがって、相変わらず、問題は次のように立てられている。すなわち、〈「未完のレーニン」か、「グッバイ・レーニン」か〉と。

(b) レーニン主義「相対化」の諸段階

かつて絶対的権威をもっていたマルクス・レーニン主義を、「相対化」する立場にもさまざまな立場と段階とがある。さし当たり、以下の4つを念頭に置くことにしたい。

- [A] スターリン無謬説
- [B] スターリンは誤っていたが、レーニンは正しかった
- [C] レーニンも誤りであった
- [D] マルクスも誤りであった

B, C, Dが相対化の立場である。今日、さまざまな立場の論客がいるが、それぞれ代表的な論客を挙げれば次のようになろう。

[A] スターリン無謬説：究極の「絶対化」の立場

①Richard Kosolabov, “Stalin & Lenin”, Prauda, 2000

伊集院俊隆訳『スターリンとレーニン』新読書社, 2003

リチャルド・コソラボフ (Richard Kosolabov) は、1930年の生まれで、モスクワ大学哲学科教授、ソ連共産党理論誌「コムニスト」編集長を経験しており、1999年 クループスカヤ生誕130周年シンポジウムで来日し、講演した。諸悪の根源は、フルシチョフのソ連共産党第20回大会における「スターリン批判」から始まったとする。

[B] スターリンは誤っていたが、レーニンは正しかったとする立場

この立場は、フルシチョフのスターリン批判やハンガリー事件を契機に誕生した日本の新左翼の立場であった。ソ連崩壊後も、この立場を堅持している論客に、S・ルバノフ (PyOанов) がおり、『手のひらの小石』を著したが、これが『レーニン批判の批判』という書名で邦訳された。

②伊集院俊隆監訳『レーニン批判の批判』新読書社, 1993

いわば、ルバノフの立場は、「レーニン絶対化」の立場である。ルバノフは、自らのモチーフを次のように述べている。「1991年8月のクーデター、ソ連共産党の解散、なかなづくソ連邦崩壊以来、脱レーニン化は、権力についての民主

主義者やナショナリストのほとんど国家政策というべきものとなった」³⁾「レーニンは今日弁護を必要としているのだろうか。つい数年前でなら、このような質問はまったく奇妙なものだったろう。…今や文字通り、以前に語られ書かれた全てを抹殺しようとして、レーニンに大量の中傷と誹謗を浴びせかけている連中がいる。たとえば、ワシーリー・グロスマン『万物は流転する』、ソロドウーヒン『レーニンを読んで』や、ツイプコ、アフナーシェフ、ボルゴゴノフ、ポポフその他の、昨日まではレーニンを讃美していたのに今では競って彼に泥をかけている「表裏ある連中」の論文や発言を読んでみるといい」⁴⁾

「彼らの誹謗と捏造を風刺できるのは、ただ、正真正銘の事実のみである。それゆえ、正真正銘の事実のみがこの本の土台になっているのだ」⁵⁾と。

そこで、われわれが「レーニンの相対化」を目ざすとき、このルバノフの立場を批判的に検討することによって達成することが出来るのではないか？

本稿では、「レーニンの相対化」のうちの実践的側面を検討することにし、理論的側面（『何をなすべきか』を中心とする）の批判的検討は、別稿に委ねることにする。

第二節 レーニンの政治的実践をめぐる事実認定をめぐる諸問題

(a) レーニン研究の新段階：秘密（未公開）資料の公開

ソ連崩壊後、従来の未公開資料が利用可能となった。こうして、それを利用したレーニン論や伝記が、続々と刊行されるようになった。そして、これらのレーニン論が今日の国際的常識（グローバル・スタンダード）となっている。ところが、島国日本では、それらが十分に消化されていないという印象を、私は抱いている。したがって、レーニン擁護派の提示する諸論点に対して、これらのレーニン論や伝記がどのような記述をしているかを確認することは、意義があると考えられる。

以下、4人の論客の著書を列挙してみよう。

①Dmitri Volkogonov, “Lenin: A New Biography”, Harold Shukman, 1994;

白須英子訳『レーニンの秘密』NHK出版, 1995

②Courtois+Werth+Panne+Paczkowski,

“Le Livre noir du Communisme”, Robert Lafont 1997

外川継男訳『共産主義黒書：犯罪・テロル・抑圧〈ソ連編〉』恵雅堂出版, 2001

③Helene Carrere D’enceausse, “Lenine”, Fayard, 1998

石崎晴己・東松秀雄訳『レーニンとは何だったか』藤原書店, 2006

④Robert Service, “Lenin : A Biography”, Macmillan Publishers, 2000 ;

河合秀和訳『レーニン』岩波書店, 2002

以下、レーニンの政治的実践がいかなるものであったのか、ルバノフが反論を試みている論点とそれ以外で重要と思われる論点を取り上げて、照合していくことにする。

では、各論争点について、両者を対比していくことにしよう。

(b) 論争点 I：非合法的資金獲得作戦

革命運動と資金問題というこの論点は、ルバノフは取り上げていないが、重要な問題である。日本におけるレーニン主義批判の嚆矢とも言えるであろう仙波輝之『レーニン 1902-12：前衛党組織論批判』では、次のように指摘している。すなわち、

「レーニンは、…この職業革命家組織を養い、その強化を通じて革命にアプローチするためには」「ボルシェヴィキにとっては、革命のためのエクス(expropriation＝強制収奪・強盗)や詐欺的行為(シュミット遺産詐欺事件)、贋金造りなどは、必要不可欠で神聖ですらあった」⁶⁾と。

〈1907年のシュミット遺産詐欺事件についてのサーヴィスの記述〉

「レーニンは、ボグダーノフと訣別することを断固決意していた。これが可能となったのは、最近になってレーニンのグループがボグダーノフからかなり財政的に独立できるようになっていたからである。モスクワの富豪の工業家サ

ーヴヴァ・モロゾフの甥で若い革命的同調者のシュミットが、1907年に急死し、遺言で何十万ルーブルもの金を二人の姉妹に残していた。レーニンはこの遺言に手をつけることを画策した。二人のレーニン派ボルシェヴィキ、V.K. タラツータと A.M. アンドリカニスにこの姉妹に求愛させ結婚させて、派の資金を得ようとしたのである。これは、道徳的にはいかがわしい計画であった。しかしレーニンにとっては、ある特定の行動が革命を助けるかどうかが基準であり、二人の相続人に恋愛感情の欺瞞をしかけることは立派に許容範囲に入っていた」⁷⁾

(c) 論争点Ⅱ：1917年のレーニンの帰国問題(「封印列車」とドイツとの関係) 〈ルバノフの主張〉

レーニンが〈ドイツのスパイ〉であったという伝説が流布している。いわゆる「封印列車」にまつわるなどである。「ドイツ政府は、西部戦線で戦闘を継続するために、東部戦線での単独講和の締結だけを考慮していたのである。しかし、レーニンとボルシェヴィキ派はそれと何の共通点も持たなかったし、また持ち得なかった。彼らはただ、革命の利益のために帝国主義者の思惑を利用したに過ぎない」⁸⁾

「彼らに対し、臨時政府は、国家反逆罪にかかわる刑事裁判を提起した。…臨時政府の法律家たちはいかに努力してもボルシェヴィキ派とドイツ官憲の連携はもちろん、ましてやロシア軍隊内での「破壊」活動や、革命の遂行と引き替えに金を受け取ったことを証明する証拠を全く見つけることは出来なかった」⁹⁾

ルバノフの結論は、次のとおりである。すなわち、

「レーニンとボルシェヴィキ派は、第一次世界大戦中、ドイツ参謀本部の「金でやとわれたスパイ」ではなかったし、二月革命後でさえそうではなかった。ボルシェヴィキ派の権力獲得後の時期については、問題は反政府政党への援助にあったのではなく、ロシアの政権内にドイツに都合のよい体制を維持することが問題だったのである」¹⁰⁾

〈レーニンとドイツ当局との関係について〉

〈ダンコース説〉

「即時停戦と革命を説くレーニンのような人物の存在は、ドイツの利益に莫大な貢献をもたらすだろう。これが駐ベルン・ドイツ公使のフォン・ロンベルク伯爵およびパルヴスの工作の意味するところであった。二人はマルトフののではなくてレーニンの要求を受け入れるよう、ドイツ政府の説得に取り掛かった。こうして協定が結ばれることになったが、その直接の原因は、敗北主義思想を広めるためにレーニンを利用しようとするドイツの意志である。その証拠は、ドイツ外務省が発信した次の電報の中に読み取れる。『皇帝陛下は今朝、ロシアの革命家たちがドイツ経由で輸送され、ロシアで工作するための宣伝機材の提供を受ける、との決断を下された』¹¹⁾

〈ドイツからの資金援助問題について〉

「6月29日、レーニンはクループスカヤと共に首都を離れ、フィンランド国境近くの村にある、友人の別荘で数日を過ごした。それは休暇だったのだろうか、それとも必要な撤退だったのか。…もう一つの動機、すなわち、用心深さである。この6月の下旬には、レーニンは政府が彼に不利な関係資料、彼の裏切りの証拠を含む資料を準備していることを察知していた。ドイツ経由で帰国したことは良く知られており、今なお厳しい批判の対象となっていたが、今度はそれに加えて、ハネツキとパルヴスによる金銭裏取引の証拠を提示し、レーニンがこの策動に無関係ではなかったこと、そしてすでに1914年からレーニンが説いていた敗北主義キャンペーンをボルシェヴィキが前例のない規模で拡大することができたのは、ボルシェヴィキの金庫に大量の流入したドイツの金によってであることを、政府は証明しようとしていたのである¹²⁾

〈サーヴィスの見解〉

「レーニン自身はこの国でドイツ政府といささか変則的な彼自身の接触を保っていた。

…レーニンがロシアの敗北を唱えていたために、ドイツ参謀本部はかえって

それを援助した。…レーニンが直接にケスクラとパブルスに会うことはあまりなかったが、ドイツ側が結果的にボルシェヴィキに資金を融通していたことを示す強力な状況証拠がある。…厄介だったのは、彼の策動を極秘にしておかねばならないことであった。もしこの秘密が漏れていれば、彼の政治生命はまさに1917年2月革命勃発の数ヶ月以前に終わり…そして20世紀の歴史は非常に違ったものになっていたであろう」¹³⁾

要するに、レーニンは、ドイツ帝国から援助を受けて「革命的敗北主義」を実践したのである。

(d) 論争点Ⅲ：1918年1月の憲法制定会議の強制解散問題

しかし、レーニンの政治的実践のうち横暴の最大なるものは、憲法制定議会の強制解散問題ではなからうか？¹⁴⁾

10月革命の直後、1917年の年末から1918年の初頭にかけて、レーニンの革命政権は、「全権力を憲法制定議会へ！」というスローガンに結集した主要な反ボルシェヴィキ勢力（左翼エス・エルを除く）との対決を迫られた。11月12日実施された選挙の結果（得票数にもとづく比例代表制で選出された707議席の内訳）は、次のようなものであった。

エス・エル→370、ボルシェヴィキ→175、左翼エス・エル→40、カデット→17、メンシェヴィキ→16、その他→89。

レーニンは、①今は分裂しているエス・エルが、選挙のときには単一の名簿を提出していたこと、②人民の圧倒的多数が、まだ十月革命の規模と意義を完全に知ることができないうちに選挙が行われたことを理由として、12月12日、「この革命の利益が、憲法制定議会の形式的権利に優先することは、必然である」とする『憲法制定議会についてのテーゼ』を書き、憲法制定議会ボルシェヴィキ議員団の集会で採択させた。

1918年1月5日、憲法制定議会が開かれた。紆余曲折ののち、その深夜、ソヴィエト中央委員会は、「憲法制定議会の解散についての布告」というレー

ニンの提案を採択した。

そこには、「人民は、この悪名高い憲法制定議会がどんなものであるかを、じかに感じとった。そしていまや、われわれは、人民の意志…全権力をソヴィエトへ、という意志…を執行したのである。…人民の権力を認めなかった憲法制定議会は、ソヴィエト権力の意志によって解散される」とあった。

近代社会の必須の構成要素である議会制民主主義を否定するレーニンの「独善性、ここに極まれり」というべきであろう。このようにして成立したソ連邦の政治体制が、極めていびつな全体主義政治体制に転化していく出発点は、ここにあったのではなからうか？

(e) 論争点Ⅳ：1918年7月の皇帝ニコライ二世と家族の死刑問題

〈ルバノフの主張〉

「このテーマにかかわる多くの出版物では、処刑執行の直接の責任がレーニンに帰せられている。しかし、歴史家たちはレーニンが直接にこの事件に関与したことについてははっきりと断定することの出来る文献資料を持っているわけではない」¹⁵⁾

〈ヴォルコゴノフの見解〉

「レーニンは、実際には皇帝一家が処刑されたことを知っていた。彼とスヴェルドロフ、トロツキーの三人は、この問題にわたって討議していた。話し合いはもつれることなく、ロシア皇帝は殺してしまうべきだという結論になった。王党派がぞくぞくと首をもち上げてきつつある時に、ボルシェヴィキが革命を危険にさらすことはできなかった」¹⁵⁾

「レーニンがスイスから帰国してまもない1917年4月21日、中央委員会はレーニン自身書いた、『われわれはヴィルヘルム二世を、王冠をかぶった悪漢であり、ニコライ二世同様、死刑に値するとみなす』という決議を承認した」¹⁶⁾

「トロツキーは、1935年にこの時のことを回想して、日記に次のように書い

ている。

『スヴェルドロフと話していた私は、そのことについて尋ねた。〈そうか、それで皇帝はどこに？〉〈もうすっかり終わったよ。彼は銃殺された〉と彼は答えた。〈で、家族はどこに？〉〈家族も彼と一緒にだ〉〈全員？〉と私はいささかの驚きを隠せずに訊いた。

〈全員だ！〉とスヴェルドロフは答えた。〈それがどうした？〉。彼は私の反応を見ようと待っていた。私は返事をしなかった。〈だれがそう決定したのか？〉と私は尋ねた。

〈われわれはこちら（モスクワ）で決めた。イリッチ（レーニン）は、今この苦境の中で、白衛軍が馳せ参じるような錦の御旗を残しておくべきではないと信じていた〉。『間接的な証拠によれば、皇帝一家の処刑命令は、レーニンとスヴェルドロフから口頭で伝えられたという』⁷⁾

〈ダンコースの見解〉

「1918年7月、皇帝一家の殺害が、ボルシェヴィキ政権の活動の妨げとなるかもしれないものをすべて抹殺しようとする政策の一環として実行された。君主とその家族はウラル山地の奥深く、エカチェリンブルクに流刑となっていたが、ボルシェヴィキ政権就任以後、無数の不如意と侮辱を耐え忍んでいた。…レーニンはさわめて早くから、迅速な解決の方を好む意向を表明していた。「ロマノフ家の人間を一人残らず、つまり優に百人余りを皆殺しにする」というのである」。この提案が1918年7月16日の夜に実行に移されたわけである¹⁸⁾

いずれにせよ、レーニンが皇帝殺害に関与したことは間違いない。

(f) 論争点V：1918年から1922年へのシューヤ問題とレーニンの手紙

〈ルバノフの主張〉

「シューヤで飢餓にひんした人たちのために教会の貴重品を接収することについて、教会関係者および信者たちと人民委員のメンバーたちとの間で衝突が起こったのである。この手紙の中に指示されている状況の幾つかは許容するこ

とが難しい。しかし、この手紙はそれが書かれることになった当時の具体的歴史的状况から切り離されて検討されるべきではない。(レーニンの健康状態や気分までも考慮すべきである。彼だって生きた人間だったのだから。)]⁹⁾

〈ダンコースの見解〉

「1918年1月23日、教会と国家の分離に関する、および学校と教会の分離に関する布告が出される。たちまち聖職者と修道女たちに暴力が行使され、彼らは逮捕されたり公然と辱めを受けた。教会と修道院は閉鎖され、略奪を蒙った。活動家たちの音頭取りで、祭壇や聖遺物を囲んで反宗教的カーニバルや神を冒瀆する催しが行われたが、当局は見て見ぬふりをした。レーニンにとって聖職者集団とは、「司祭服を纏った反革命分子」のみからなるものだった。教会会議で総主教に選出されたティホーンは慎重に行動し、嵐を鎮めようと努め、教会を内戦に参入させることを回避して、妥協を成立させようとして、何度もレーニンに会見を求めたが、努力は水泡に帰す。レーニンはいかなる交渉をも拒絶したのである。しかし、飢饉はロシアの主レーニンに、宗教に対して裏で仕掛ける表面化しない闘いから公然たる戦争へと移る機会を与えることになる。総主教は、飢えた者の救援に馳せ参じるよう呼びかけをしたのに続いて、教会による救援を組織するために全国聖職者会議を創設した。しかしこの評議会はたちまち禁止されてしまう。…レーニンからモロトフ宛に出された、政治局のメンバーだけを対象とする、1922年3月19日付きの「極秘文書」は、この事件におけるレーニンの態度を不吉な光の下に照らし出している。

「無数の暗黒の聖職者」が、聖なる物品の押収を口実として、ソヴィエト権力に対して戦いを開始しようとする計画を練り上げていたとの確信…これは一度も確証されはしなかった…に立脚して、レーニンは次のように書いた。『われわれにとって、今この時は、われわれが敵(教会)を破壊し、今後数十年間、必要不可欠な位置を確保することができる確率が99%ある時期である。まさしく今、そして飢えた地域で人々が人肉で飢えをしのぎ、数百ないし数千に及ぶ死体が路上で腐敗して行く今この時においてのみ、われわれはもっとも粗暴

にしてもっとも情け容赦ない活動をもって、教会の宝物の没収を実現することができる（そしてそうしなければならないのである）。そしてこれを首尾よくなし遂げるために、レーニンは同じ文書の中で、『なにもものを前にしても立ち止まることなく、暴力的で容赦のない没収を、そして反動的聖職者集団と反動的ブルジョワジーのできる限り多数の代表者たちの処罰』を実行すべきことを命じている。「処罰の数が多ければ多いほど、うまく行くだろう」²⁰⁾

「処刑執行に関するレーニンの指令は、遵守された。1922年には、8千人近くの教会に仕える者たちが『粛清』された。…司教たちは大部分が逮捕され、収容所へ送られた。いわゆる『陰謀』がこの収容所送りの根拠となっていた。総主教だけはこの運命を免れた。西欧で高潮のように抗議の声が上がったため、レーニンは総主教を、己が罪を認め署名をすることと引き換えに、自宅軟禁に留めるだけにする決意をしなければならなくなった」。

「この時初めて、自己批判がソヴィエト政治に登場した。これは後にスターリンが、葬り去りたいと思う者全員に強要することになるものである」²¹⁾

(9) 論争点Ⅵ：赤色テロ問題

〈ルバノフの主張〉

「人々への暴力はわれわれの理想ではない」、「共産主義は暴力の助けを借りずに根を下ろす」というレーニンの声明はよく知られている。事実、レーニンの数多くの国家的決定は、深いヒューマニズムに貫かれている²²⁾

「残酷で無慈悲かつ血なまぐさい白色テロ。この際覚えておかなければならないのは、それからすべてが始まった、ということである」²³⁾

「テロを〈管理〉し、あるいは〈避ける〉というレーニンの試みは、巨大な地域に拡がった国内戦の進行の過程でしばしば跡形もなく消え失せたことを認めないわけには行かない。レーニンが守ろうと努めた革命的暴力の規準もまた、各地の多くのボルシェヴィキにとっては不明確で、この規準が至る所で破られたために血まみれの兄弟殺しの闘いに至ったのである」²⁴⁾

「白色テロへの報復としてソヴィエト政権によって導入された赤色テロは、国内戦と階級間の決死の抗争という具体的状況から発したものであった。スターリンこそは、平時時に自国民に対し集団虐殺を行った。しかしながら、レーニンがこの集団大虐殺の開祖であったことはなく、またありえないのである」。

この「赤色テロ」こそ、レーニンの政治的实践を貫いている論点である。もちろん、レーニンの伝記を書いた3人も、「赤色テロ」を論じている。

ここでは、ダンコースの記述を引用しておこう。

「新たな権力の決定的な道具の一つは、早くも形をとり始めていた。レーニンが『国家と革命』の中で気前よく社会に帰属すべきものとした権限、抑圧の権限である。この権限の誕生は、革命権力の誕生とほぼ時を同じくしている。そしてこれは時を移さずレーニンによって、テロルの革命的使用のために必要な手段として正当化される。彼の旧友、アドラツキーは次のように報告している。早くも1906年に、彼が政権獲得後に敗者がたどる運命についてレーニンに質問したところ、レーニンは彼に「われわれは彼らに革命に賛成なのか反対なのかを問うことになる。賛成ならば彼らをわれわれのために働かせる」と答えた。

そして彼は好んでマルクスから『革命的テロルは新秩序の誕生にはなくてはならないものであった』という文を引用した⁵⁾

だが、赤色テロルを最も体系的に論じているのが、『共産主義黒書：犯罪・テロル・抑圧〈ソ連編〉』の第一部を執筆したニコラ・ヴェルトである。ここでは、その「訳者解題」より、第2章と第3章を引用しよう⁶⁾

〈ニコラ・ヴェルトの見解〉

第二章「プロレタリア独裁の武装せる腕」

「軍事革命委員会のをうけて『反革命、投機およびサボタージュと闘う全ロシア非常委員会』(＝チェーカー)が、創設される。この時レーニンはジェルジンスキーを初代長官に推薦した。「その後ゲーペーウー、NKVD、KGBなどと名を変え、所属を変えて今日まで存在する国家保安機構＝政治警察は、ソ

ヴェトナムの権力そのものを代表する暴力装置となった。ここでヴェルトは、「赤色テロル」がすでに革命直後に始まっており、それを主として担当したのがチェーカーだったことを指摘する。さらに彼は、この組織がいかなる法令にもとづくものでもなかったことを強調する。これと同時に『人民の敵』という新しいカテゴリーがつくられ、以後の弾圧政治において重要な役割を果たすようになる。このほか1918年5-6月には、『戦時共産主義』を開始することになった『食糧徴発隊』の創設と、『貧農委員会』の設立を重視する。この食糧徴発政策は、三年間に何千という農民の暴動と改革を生み、一部農民はゲリラとなったが、体制はこれをこの上ない残酷なやり方で弾圧したのだった。チェーカー隊員(チェキスト)の数は、1918年3月には600だったのが18年4月には2000に、年末には4万に、そして1921年初めには8万人以上に増加したことを著者は示している。この章において、著者はレーニンがチェーカーの創設とその活動において、中心的役割を果たしたことを史料に即して描いている」。

第三章「赤色テロル」

「1918年の夏、ボルシェヴィキは、三方を白衛軍に囲まれ、かつてのモスクワ公国ほどの自分たちの領域内においても、食糧の徴発と徴兵に反対する農民の共同体は、反乱を起こしていた。社会革命党やメンシェヴィキの反乱は、これに比べれば、ものの数ではなかった。このような反乱の鎮圧のために、ボルシェヴィキ政権は首謀者の処刑や「強制収容所」収監を行ったが、これは「赤色テロル」の宣言の出る一ヶ月前のことだった。

9月5日の「赤色テロルについて」の政令の後、テロルはさらにテンポを速め、裁判なしで銃殺される者が激増した」。

以上のように、ルバノフがレーニンを擁護するために言及したすべての論点は、ことごとく論駁されてしまったと判断してよいのではなからうか？

第三節 レーニン主義の本質：

権力の奪取と固執…そのためには手段は選ばない

レーニンとは、どのような人物だったのだろうか？ 色々なレーニン像が提出されているが、もっとも適切なものは、フョードル・ダンの「一日二十四時間、革命のことだけに専念して、革命のこと以外は考えず、寝ている時にも革命を夢に見るような人間」²⁷⁾ではなかろうか？ そのようなレーニンが実際に行った諸実践の内容を点検していくと、おのずから浮上してくるのは、赤色テロの飽くなき実行者というイメージである。そのようなイメージは、真にレーニンによって抱かれていた信念なのであろうか？ レーニンの著作を繙けば確かに裏付けられるのである。

(a) レーニンの政治的信念 (=確信)

レーニンは、「独裁の問題の歴史によせて (覚え書き)」において、「独裁という科学的概念は、なにものにも制限されない、どんな法律によっても、絶対にどんな規則によっても束縛されない、直接暴力に依拠する権力以外のなにものも意味しない」と主張している²⁸⁾

このような信念は、どのような経緯によってレーニンの心の中で形成されてきたのであろうか？ 革命の達成のみを四六時中念願していたレーニンは、フランス革命を深く研究していた。その結果、フランス革命におけるロバスピエールやジャコバン派の経験から多くのことを学んだ。そして、チェーカーを創設する時には、レーニンは「われわれの中にフーキエ・タンヴィルのような人物はいないのか」と言っていた（タンヴィルとは恐怖政治による冷酷さで有名となった革命裁判所検事である）し、さらにフランス革命における極左派の失敗の原因を赤色テロルの不徹底に求めることになったという。リチャード・パイプスは、『共産主義が見た夢』において次のように指摘している。

「反対派を壊滅させ、残りの全国民を脅して服従させるため、レーニンは無

制限のテロルに訴える態勢を十分に整えた。彼がそうしたの、一部には人命に無関心だったからであるが、また一部には、過去のすべての社会革命は、それを途中で断念することで、彼らの階級の敵を生き延びさせ、再び結集させたからこそ失敗に終わったのだということを歴史の研究から学んでいたからだった。全面的で容赦ない(レーニンが最も好んだ形容詞のひとつ)暴力によって、新しい秩序の基盤を整えなければならない。しかし彼はまた、そのような暴力は短期間に行わなければならないとも考えていた。…その期待に反して、これらの残虐行為はレーニン体制の永続的特徴となった²⁹⁾と。

要するに、レーニンは、共産主義社会の建設がマルクス主義による科学的に裏付けられていることへの確信、それゆえ、そのために国家権力を奪取し、一旦獲得した国家権力は絶対に手放さないという覚悟、そのためにはいかなる手段も許されるという信念を抱いていたのであった。

このような理解を示す見解は、レーニン研究者には多い。以下、若干の証言を引用しておこう。

①ヴォルコゴーフ

「レーニンが革命政府の支配権を握った時、彼には理論的構想があっただけで、自分の妻以外のだれも支配したことはなかった。彼は山のようなロシアの問題に直面して、ただ途方にくれるばかりだった。思いつくことといえば、あらゆるものを没収したり、取り上げたりすることだけだった。これを行うには、ただひとつの手段である冷酷な独裁政権が必要であった。ほんの二、三ヶ月前には、国家の衰退を語っていたのに、今や彼は大慌てで軍隊、裁定委員会、人民委員、監察官、秘密部局、外交団を創設した。新しい国家機構は、軽蔑していたブルジョワ“専門家”の助けを借りなくては動かすことができなかった³⁰⁾」

②ダンコース

第十一章のタイトルは、そのものずばり「是が非でも権力を守る」である。「ボルシェヴィキ国家は、既知のあらゆる国家とは異なる国家、過渡的な国家

であるが、存続しようとするならば組織されなければならない。いかにして政権を取るか…という、レーニンがかくも長い歳月にわたり育んできた偏執は、いまやもう一つの偏執を生み出す。いかにして権力を保持するか。この問いに対する答えは単純ではない。…

レーニンにとって、妥協によって己の権力を弱めることは、問題外である。彼はそのことを、憲法制定議会を解散することと連立政府という考えを拒否することによってはっきりと示した³¹⁾

ダンコースの先の引用文の続きは、次のようになっている。すなわち、
「諸々の困難を理由として権力を譲り渡すのはさらに問題外である。持ちこたえる必要があった。権限の行使に必要な道具を手中にしなければならなかった³²⁾と。

ここで、レーニンが手中にした「権限の行使に必要な道具」を枚挙してみよう。

[I] チェーカー

ダンコースは、チェーカー誕生の経緯を次のように述べている。

まず、『軍事革命委員会』において、5人からなる『軍事調査委員会』が誕生したこと。

次に、レーニンはこの機関は一貫性がなく、効果のないものと考え、12月7日には『反革命、破壊活動、投機と闘うための全ロシア臨時委員会』を設置した。これはその頭文字を採った Tcheka の名で歴史に悲劇的な名を残すことになった。すなわち、

「チェーカー設置の布告は報道されなかったし、その職務はきわめて曖昧に定義されたにすぎなかった。当時発表されたいくつかの文書は、この新しい機関は破壊活動と反革命の企てを未然に防ぐための調査を行い、被疑者を法廷に付託することを任務とする、と示唆しているが、実際には同委員会はその発足直後から、無制限の調査・抑圧の権限を有していた。1917年10月27日に、

第2ソヴィエト大会は、論争もせず死刑を廃止していたが、チェーカーは他のいかなる機関にもその決定を報告することなく独断で死刑を活用した。もっとも、レーニンはこの死刑廃止の決定に内在する愚直さを、『銃殺をせずにどうやって革命ができるというのか』と嘆いていたものだ。…そして死刑廃止の決定が無視されても気にかけず、直ちにジェルジンスキーに、チェーカーの有効性を確保するという条件の範囲で職務を行使する手段を認めることになる。人民委員の事務局がまだ存在しない時に、120人の協力者で仕事を始めたチェーカーは、一年後には3万人以上を数えるまでになるのである」³³⁾と。

さらに、チェーカーを設置するレーニンのモチーフを、次のように記述している。

「トロツキーやジノヴィエフとは逆に、レーニンは設置される武力機構の組織構造について、無益な遺憾の念に迷い込むことは決してなかった。いかなる時にも、これらの組織が消滅するに至る最終段階に言及することはなかったのである。もっともこの増大する警察権力は、党に関する彼の著書の題辞として『純化（肅清）する』と記されていたように、レーニンがモットーとするものの論理に沿ったものだったのではなからうか。1918年に始まる実践は、明らかに、彼が早くも1902年に開陳し、爾来決して離れることのなかった権威と統御の概念から派生しているのである」³⁴⁾と。

[II] 強制収容所

ダンコースは、次のように述べている。

「テロルは、この時期の間に多様な形態を取った。早くも1918年夏から、農村において階級の敵に対して用いられた逮捕、裁判なしの死刑、さらに人質を取るという行為…これは1918年9月4日の布告によって大規模に組織された…といった手段は、強制収容所の創設によってさらに増強された。ここには、政権に敵対するとの疑いを政権によってかけられたすべての者、あるいは「聖職者、『白衛』軍兵士、グラグ、その他の疑わしい分子」といった、すでに

予め「有罪判決を受けている」さまざまなカテゴリーに属する者が、法的措置もとられないまま送りこまれていた」³⁵⁾ 有名なものは、ソロベツキー諸島にある修道院で2007.10.7のNHKのTV番組『世界遺産』でその歴史が紹介された。

ヴォルコゴノフの記述は、次の通り。

「矯正労働収容所国家管理本部（グラーク）による強制的な収容所送りというシステムや、1930年代のぞっとするような粛清といえ、すぐにスターリンの名が連想されるが、ボルシェヴィキの強制収容所、処刑、大規模テロル、国家の上に立つ“機関（オルガン）”の生みの親は、レーニンだった。…レーニンは、ただ単に革命的テロルを示唆しただけではない。彼はそれをはじめて国家的制度にしたのである」³⁶⁾

なお、強制収容所については、次の文献がある。

①Alexander Solzhenitsyn, “The Gulag Archipelago”, 1973

木村浩訳『収容所群島』全6巻、ブッキング、2007

②Anne Applebaum, “Gulag : A History”, Penguin Books, 2004

川上洸訳『グラーク：ソ連集中収容所の歴史』白水社、2006

その他、レーニンは、ただ単にチェーカーや強制収容所といった権力の維持・確保といった防衛的な機関だけではなくて、さらに世界革命を目指した諸機関をも創設している。

それらのなかには、コミンテルン（世界共産党）や情報機関（それ自体は、チェーカーが機能を拡大・増殖されていくなかで、発展してきたもので、これには、スパイ組織、謀略機関、宣伝（プロパガンダ）などの諸機能を持っている）があるが、これらは、それ自体として、その全容が解明される必要がある。

(b) レーニンがさまざまな「赤色テロル」を実行したモチーフ：「空想的社会主義」への狂信

レーニンがあれほど残虐な「赤色テロル」を実行できたのは、マルクス未来社会＝共産主義が実現可能であり、マルクス主義が「科学的社会主義」であり、

どのような犠牲を支払ってでも実現に励まなくてはならないという信念（＝狂信？）があったからではなかろうか？

私は、2007年1月に刊行した『近代の〈逸脱〉』（法律文化社）において、マルクス主義は、通説と違って、「空想的社会主義」であると主張した。なぜなら、マルクスは、「人間的解放」の科学的根拠を求めて、ブルジョワ社会を「資本制社会」として捉え返し、資本－賃労働関係の止揚に解放の根拠を求めた。そして、近代社会を支えている諸制度をすべて廃止・死滅させることを目指したのであった。すなわち、国家、企業、家族、政党・政治（議会）、学校など近代的諸制度の廃止、死滅…である。

1917年のロシア革命以後の「社会主義の実験」が証明したのは、そのようなマルクスの企図が「空想的」であったということである。レーニンもマルクスを踏襲して「空想的社会主義者」であった。ヴォルコゴノフは、「憲法制定会」を扼殺したレーニンについて、次のように述べている。

「反抗精神という十字架を負った古いロシアの知識人には道義心があった。彼らは律儀な理想主義者だった。レーニンは、こうした“短所”を“克服し”、自分は典型的なマルクス主義者の新しいインテリであることを示した。彼は、権力の目標に役立ったものであれば、自分にはどんな実践でも行う権利があると信じている空想的社会主義の狂信者だった。…レーニンの頭の中にあっただのは、“人類”のことではなく、自分の想定した共産主義社会を建設するのに好都合な大衆のことだった」³⁷⁾と。

ヴォルコゴノフが、私と同じく、レーニンを「空想的社会主義の狂信者」と規定していることは極めて興味深い。

(c) ソ連型国家社会主義が74年間も存続できた原因：〈ロシア革命を評価できる部分〉

これまで、ロシア革命のあまりにもネガティブな側面のみを、列挙してきた。しかしながら、いかに否定的な部分が多くあろうとも、そのようなソ連型

国家社会主義が74年間も存続できたのには、それなりの根柢があるのではなからうか？ そのことを本節の最後に考えてみよう。それは、やはり、マルクスやエンゲルスが掲げた理想（「一人一人の自由な発展が、すべての人の自由な発展のための条件となるような連合体」＝共産主義社会の実現）をめざしているという幻想がロシアの民衆のあいだにあったからではなからうか？ そしてまた、74年間に“社会主義”的政策が実施されたからではなからうか？

後者については、ヴォルコゴーフは、次のように述べている。

「レーニン主義体制は、挫折して崩壊寸前とはいえ、その生命力は異常に強い。それは、惰性的な社会や党の権力独占ばかりではなく、レーニンの“社会主義”を特徴づけるいくつかのもっといい面によっても説明できる。①無償で受けられる教育、②医療、③休日手当、④宿泊施設、⑤完全雇用、⑥最低賃金保障その他のたくさんの基本的社会保障の広い基盤がつけられた。社会正義という理想が実現されたかのように見えたが、それはみな、労働者とこの国の資源の搾取という犠牲の上に遂行されたことは確かだった」³⁸⁾と。

第四節 今後の課題

(a) ヴェーバーの予言

以上のようなレーニン主義による「社会主義の実験」は、民衆に「社会主義」への決定的不信を植え付けて終焉してしまった。

マックス・ヴェーバーは、1919年のハンガリー革命に文部大臣として参画した教え子のルカーチ（1864-1971）宛の手紙（1920年春）で、次のように述べたという。

「これらの（社会主義の）実験は今後100年にわたって社会主義の信用を傷つけるという結果にしかならないだろうというのが、私の絶対的な確信です」³⁹⁾と。

しかしながら、社会主義への不信を払拭して再度民衆次元で社会主義が蘇生するためには、どうやらヴェーバーの言う100年程度ではなくて、少なくとも

あと 50 年程度は、時間がかかるのではなからうか？

(b) レーニンへの訣別とオルタナチブの模索

社会主義が民衆の信頼を取り戻すためには、並大抵の努力では成功しないのではなからうか？ 私見では、多大の悲惨な犠牲を伴って人類が経験した「社会主義の実験」の真に根源的な総括＝「レーニン主義の根源的な総括と訣別」を遂行し、そこから貴重な教訓を学び尽くすことこそが、真に今われわれに求められているのではなからうか？ さらに、それを社会主義と呼ぶにせよ、呼ばないにせよ、「人間にとって、どのような社会が望ましい社会なのか？」の根底的な模索がなされなければならないであろう。それには、(理念的要素を欠落した) 狭隘な唯物史観を放擲し、19 世紀末に登場したカント派社会主義(マルクス主義)などの再評価を踏まえて、さらに現代的掘り下げがなされる必要があるのではなからうか？

注

- 1) 千石好郎『近代の〈逸脱〉』法律文化社、2007：193 頁，164 頁
- 2) 白井聡『未完のレーニン』講談社選書メチエ、2007。本書については、太田仁樹「マルクス主義理論史研究の課題 (XV)：白井聡『未完のレーニン：〈力〉の思想を読む』によって」『岡山大学経済学雑誌』第 39 卷 3 号 (2007 年 12 月) が、適確な論評を行っている。
- 3) S・ルバノフ (PyOaHOB)『手のひらの小石』(1993)；伊集院俊隆監訳『レーニン批判の批判』新読書社、1993：9 頁
- 4) 同：7 頁
- 5) 同：17 頁
- 6) 仙波輝之『レーニン 1902-12：前衛党組織論批判』論創社、1982：314-5 頁
- 7) Robert Service, "Lenin: A Biography", Macmillan Publishers, 2000；河合秀和訳『レーニン』岩波書店、2002：上巻：257 頁
- 8) S・ルバノフ (1993)：203 頁
- 9) 同：207 頁
- 10) 同：212 頁
- 11) Helene Carrere D'encausse, "Lenine", Fayard, 1998；石崎晴己・東松秀雄訳『レーニンとは何だったか』藤原書店、2006：257 頁

- 12) 同：279 頁
- 13) サーヴィス『レーニン』上巻：331-2 頁
- 14) 以下の記述は、中野徹三・高岡健次郎『レーニン』清水書院（1970）に依拠している。
- 15) S・ルバノフ（1993）：159 頁
- 16) 同：336 頁
- 17) 同：342 頁
- 18) ダンコース（2006）：433 頁
- 19) S・ルバノフ（1993）：160 頁
- 20) ダンコース（2006）：564 頁
- 21) ダンコース（2006）：566 頁
- 22) S・ルバノフ（1993）：150 頁
- 23) 同：151 頁
- 24) 同：155 頁
- 25) ダンコース（2006）：339 頁
- 26) Courtois, Werth, Panne et Paczkowski, “Le Livre noir du Communisme”, Robert Lafont, 1997; 外川継男訳『共産主義黒書：犯罪・テロル・抑圧<コミンテルン・アジア編>』恵雅堂出版, 2006 : 306-7 頁
- 27) サーヴィス『レーニン』（上）：261 頁
- 28) 「独裁の問題の歴史によせて（覚え書き）」『レーニン全集』第31巻：341 頁
- 29) Richard Pipes, “Communnism”, Weidenfeld & Nicolson, 2001; 飯嶋貴子訳『共産主義が見た夢』講談社, 2007 : 63-4 頁
- 30) ヴォルコゴノフ『レーニンの秘密』下巻（1994）NHK出版, 1995 : 350 頁
- 31) ダンコース『レーニンとは何だったか』：386-7 頁
- 32) 同：387 頁
- 33) 同：389-90 頁
- 34) 同：396 頁
- 35) 同：396 頁
- 36) ヴォルコゴノフ（1995）上巻：376 頁
- 37) 同上巻：268 頁
- 38) 同下巻：365 頁
- 39) Max Weber to Georg Lukacs, “Selected Correspondence 1902-1920”, selected, edited, translated and annotated by Judith Marcus & Zoltan Tar, New York, 1986, p. 281.

（本稿は、2008年度松山大学特別助成の成果の一部である。）